彼女と過ごす午後

洗濯物を畳む彼女の横顔に、天地は見惚れた。
「何、あたしの顔に何か付いてる？」
「えっ」
彼女の凛とした声が響き、その意志の強そうな瞳が天地をとらえる。
「ずっと先刻から見ているから」
「あ、ごめん…」
つい見惚れてしまったのだと天地は思ったが、言葉にはせず、テキパキと動く彼女の手に再び視線を戻した。動物型の魎皇鬼が、彼女が畳もうとしたタオルにじゃれつく。
「こら、だめよ魎皇鬼」
「みゃん」
魎皇鬼に注意をすると、それも畳み、彼女は立ち上がると、
「天地殿、お腹空かない？」
天地に笑いかけた。

阿重霞と砂沙美と美星が、買い物に行くと出かけたのは、午前中の事だった。
「天地兄ちゃんのお昼ご飯までには帰るからね」
と、砂沙美は言ってくれたが、たまの気晴らしも大事だろうと
「俺の事は構わないから、ゆっくりしておいで」
と、了承した。
「でも、天地様…」
それでも気にする阿重霞に、天地と共に見送りに出た鷲羽が
「大丈夫よ、あたしもいるし。天地殿の事は気にしないで」
請け負った。阿重霞は多少不満な顔をして出て行った。
「ねぇ天地殿知ってる？」
「何です？」
野菜を細かく刻む鷲羽の隣で粉末スープの素を溶きながら、天地は返事をした。
「阿重霞殿、きっとあたしと天地殿が二人きりになるのが心配だったのよ」
「えっ…」
単純に、阿重霞は食事の事を心配しているのだろうと思っていた天地は驚いた。
「でも、魎呼も魎皇鬼もいるじゃないですか」
「あら、だって魎呼ちゃんは朝から見えないし、魎皇鬼は幼児だから数に含まれないわ」
そんなもんかなと天地は首を傾げた。
手際良く素材をフライパンに入れると、鷲羽はシャッシャッとフライパンを軽く振った。見事な手つきだなと天地が感心している間に、ピラフが出来上った。

「天地殿、ボサっと立っていないで、お皿出して頂戴」
「は、ハイ」
慌てて天地は戸棚から皿を出した。どの皿が良いか迷っていると、鷲羽がその姿を見て、ほのかに笑った。

「美味しい！」
「そうでしょ？宇宙一の天才科学者が作ったんだから、当然よ」
「うん、本当に美味しいよ！」
パクパクとピラフを平らげていく天地に鷲羽は
「まだ沢山あるから、おかわりして頂戴」
と笑いかけた。
（鷲羽ちゃんってすごいな…）
天地は改めて思った。
（料理もこんなに上手なんだ…）
それに…洗濯物を畳んでいた鷲羽の横顔を思い出した。それに、働く彼女の姿は誰よりも素敵だと天地は思った。
（考えてみれば、鷲羽ちゃんはお母さんだったのだから、当り前なのかもしれないけど…他の女の子達には無い魅力だよな…）
　天地がスープのカップ越しに鷲羽を見ると、鷲羽は人型になった魎皇鬼にスプーンを持たせ、食べる手伝いをしてやっていた。その姿は「お母さん」という言葉がピッタリだった。慈愛に満ちた優しい瞳。安心させる様な穏やかな口調。自分の母親もこうやって自分を育ててくれたのだろう、天地はそう思った。
「何？天地殿も食べさせて欲しいの？」
からかうように鷲羽が言う。
「え、違うよ」
「ふふ。魎皇鬼が羨ましいのかと思ったわ」
「みゃん」
魎皇鬼が天地に自分のスプーンを差し出す。
「違うってば、魎皇鬼」
「みゃん？」
「ふふ。天地殿は、ママの作ったピラフがあまりにも美味しくて吃驚したんだって」
魎皇鬼の顔を覗きこみながら、鷲羽が言うと、魎皇鬼がにっこりと笑顔になった。
「みゃん！」
「魎皇鬼も美味しかった？」
「みゃああん」
魎皇鬼の髪を撫でながら鷲羽が尋ねると、魎皇鬼は大きく頷いた。

「それは、良かったわ。ね、天地殿」
急に鷲羽に振られ、天地はドキっとした。その天地の様子に、鷲羽はまた悪戯っぽく笑った。

「鷲羽ちゃん、俺が片付けるよ」
食べ終わると天地は率先して後片付けをした。傍で魎皇鬼もお手伝いをする。
「天地が片付けてくれて助かったわ」
天地と向き合い、食後の珈琲をゆっくりと味わいながら、満足そうに鷲羽が言うので、天地は照れた。
「鷲羽ちゃんのご飯、本当に美味しかったよ」
「そう？良かった。でも、あれは料理ってほどのもんでもないから、今度、ちゃんとしたご飯作ってあげるわ」
何が良いかしらねーと、うきうきと嬉しそうな鷲羽は、いつもの鷲羽とは違う人の様に見えた。
「何？」
またも天地が鷲羽の顔を見ているので、鷲羽が尋ねて来た。天地はマグカップの中の珈琲を見つめた。
「鷲羽ちゃんって、こんな顔もするんだね」
素直に言うと、鷲羽は少し驚いた様だった。
「こんなって？」
「嬉しそうな顔…。俺、今までこんな愉しそうな顔、見なかった気がしたから」
「そう？天地殿の気のせいよ」
「そうかな…」
「或いは、天地殿が見ていなかっただけか…。天地殿は、他にも沢山、見てなきゃいけない子がいるもんね」
「…ああ、魎呼達は、すぐに喧嘩するからね」
天地は何の気なしに言ったが、鷲羽は少し視線を落とし、哀しげな顔をした。
「そういうことじゃなくて」
「え…」
天地は鷲羽の言葉の続きを待ったが、鷲羽は何も言わずに、珈琲を飲んでいる。
（俺、何か気に障る様な事を言ったかな…）
天地が鷲羽の様子を伺っていると、魎皇鬼が鷲羽の膝に甘えてきた。お腹が一杯になって眠いのだろう。ふみゃふみゃと言っている。
「寝ても良いわよ」
鷲羽が言うと、魎皇鬼は膝の上で丸くなった。人型なのに、動物みたいだなぁと、天地は思った。鷲羽は優しく安心させるように魎皇鬼の頭を撫でながら、ねぇと、静かに天

地に語りかけてきた。
「ねぇ、天地殿。天地殿は、将来って考えた事ある？」
「しょ、将来？」
「誰かと穏やかに過ごしたいとか…」
鷲羽の急な問い掛けに、正直天地は戸惑った。
「無いよ…そんなの考えた事も無いし…」
「天地殿、先刻、あたしが愉しそうに笑ってるのを見た事が無いって言ったけど、あたし、結構、今、愉しいのよ。毎日…何も心配する事もなく過ごせているもの」
「…やっぱり、気に障った？」
「ううん、そうじゃないの…ただ、天地殿に知っておいて貰いたいと思って」
鷲羽は魎皇鬼に視線を向けたまま、顔を上げなかった。天地はゆっくりと鷲羽の言葉の続きを待った。
「天地殿にね、今、あたしが愉しく暮らせている事、知っていて欲しい」
「俺に…？」
「そう。安心して、毎日、暮らせているって…」
天地は鷲羽の言う「安心」の意味を図りかねた。鷲羽は暫く黙っていたが、
「毎日、色々な事があるけれど、あたしは、どれひとつとっても、大事な事だと思ってる」
「…うん…」
「天地殿は大変かもしれないけれど、あたしは毎日愉しいわ」
「鷲羽ちゃん…」
「だから、此処に居られて嬉しいわ。その事、天地殿には忘れないで欲しい」
天地は鷲羽を見つめた。鷲羽はパッと顔を上げると、優しく微笑んだ。その瞳に涙が光っていた事に、天地は気が付かなかった。
「俺も、毎日愉しいよ。皆と居られて…」
「そう？…天地殿、今度は特別に美味しいご飯にするわ、きっとね」
「うん、楽しみにしているよ」
二人は見つめ合って、微笑んだ。鷲羽の気持ちを汲んでやる事が出来たかどうかは分からなかったが、天地は二人に流れる、ゆっくりとした時を大切に感じた。

「おいっ」
鷲羽と天地が微笑み合っていると、何処からか現れた魎呼が机の上に降り立った。つまり、鷲羽と天地の間だ。
「何してんだよ、鷲羽」
「あら、魎呼ちゃん」
鷲羽がいつもの鷲羽の顔に戻って魎呼を見上げた。平然としている。

「あらじゃねぇだろっ。あたしの天地と何をしてたんだよ！」
「天地殿と将来を語り合ってた」
流石、魎呼の親…いや、魎呼よりも度胸がある。天地は冷や汗が背中を伝うのを感じた。
「将来ぃ？」
「そ、家はどのくらいの広さにするかとか、何才くらいに一緒になって、子どもは何人欲しいかとか…ね」
鷲羽が意味ありげに天地に笑いかけ、魎呼がギロリと鷲羽を睨み据えた。
「子どもだとぉ？」
「そうよ。大切な事でしょう。まあ、あんたの兄弟…」
その瞬間、魎呼がオーラ・ブレードで鷲羽に切りつけた。勿論、鷲羽は魎皇鬼を抱えたまま器用に魎呼の刃を避けた。
「危ないでしょう」
「危ないでしょうじゃないだろっ。あたしの天地に…」
「魎呼ちゃんも、天地殿と将来について語り合えば？」
ニヤリと鷲羽が言うと、魎呼が赤面のまま固まった。「な、そ、そんな…」と、魎呼はアワアワと言っているが、言葉にならない。
「じゃあ、天地殿、またね。あ、魎呼ちゃん…」
固まっている魎呼の片腕に魎皇鬼を抱きかかえさせると、あっけらかんと研究室に戻って行った。魎呼がハッと気が付いた時には腕には魎皇鬼、片手に刃という出で立ちだった。
「天地っ！あいつと何してたんだよ？」
魎皇鬼を片腕に、怒る魎呼に、天地は笑った。
「何が可笑しいんだよ？」
ぶうたれる魎呼に天地は立ち上がりながら、
「何でもないよ。やっぱり、鷲羽ちゃんの言う通り、うちは色々あって愉しいなと思ってさ…」
「はあ？何だよ、それ…あ、天地…そのぉ、あいつと…まさかとは思うけど…」
「うん？」
「そのぉ…」
魎呼はモジモジと天地の顔色を伺った。天地は魎呼が何を言いたいか分かっていたけれど、今日は何だか鷲羽に合わせて見たくて、さあねと、笑ったのだった。